

終戦から70年以上過ぎていますので、私自身には直接の戦争体験はありません。しかし、私の父親やその兄弟は戦争に参加していました。

私の父は少年飛行兵でした。訓練を積んでやがては戦闘機のパイロットを目指していたようです。初歩の飛行訓練は新舞子あたりの海岸で、グライダーを使って行われていたと聞きました。

海岸での訓練中のある日、沖に現れたアメリカの軍艦からの砲撃がありました。少年兵たちは一斉に砂浜に掘ってある塹壕（通称：たこつぼ）に隠れました。激しい砲撃がしばらく続き、父の隠れていた隣のたこつぼは砲弾の直撃を受け、仲間が亡くなったそうです。その時の破片で父も負傷しました。ケガは命に関わるものではありませんでした。しかし、父の右の脇腹には消えることのない傷ができました。そして考えてみれば、その着弾が数メートルずれていれば、亡くなるのは父だったはずで、そうなら私もこの世に生まれてこなかったこととなります。

戦争は国家と国家のもめ事を武力で解決しようとすることです。「国家と国家」とはいえ、実際には人間同士が武器を使って争うことです。そして傷つき亡くなるのは人間である私たち一人ひとりです。勝っても負けても個人には心や身体の傷・悲劇しか残りません。

父の身体に刻まれた傷を見ながら、話を聞いたのはいつのことだったか、はっきりとは覚えていません。父と一緒に入浴した時だったか、それとも家族で海水浴に行った時だったか。いずれにしても「平和な時」に聞いたに違いありません。

こんなふうに戦争の話ができるのは今が平和である証拠です。しかし、その直接の証人は段々と減っています。知識がなければ正しい判断はできません。そのためにも戦争から目をそらさずに様々な情報に触れてほしいのです。身内や親類に年配の方がいたら、ぜひ当時の話を聞いてほしいのです。

知識が蓄積されれば、正しい判断へとつながり、やがては戦争の無い世界をもたらすと私は確信しています。